

## 辞書検索活動から課題遂行能力の向上を考える —iPod touchを用いた初級漢字クラスを例に—

Dictionary Use in the Enhancement of Language Learners' Task Competence:  
Observations on the Use of iPod Touch in a Beginning Kanji Class

鈴木理子（桜美林大学）・齋藤伸子（桜美林大学）

SUZUKI Satoko (J. F. Oberlin University), SAITO Nobuko (J. F. Oberlin University)

### 要 旨

「課題」とは、何らかの目標や目的を達成するために行う行為のことをいう。筆者らは、非漢字圏の初級学習者対象の漢字クラスの実践を通して、iPod touchの辞書の使用が、漢字を含む生活上の課題遂行の困難さを軽減するのではないかという結果を得た。ラウンドテーブルで辞書検索を体験し、授業活動案を作成した参加者の反応から、学習者にとって使いやすいツールと生活上の課題を授業に取り入れることは必ずしも容易ではないものの、参加を通して課題遂行能力に対する意識が高まったことが示唆された。

A task is an action or series of actions taken to achieve a specific goal. On the basis of classroom practices in a beginning kanji class, the authors concluded that the use of an iPod touch dictionary application may lessen the difficulty of accomplishing practical language tasks involving kanji. Feedback provided in the round-table session, during which participating teachers used the iPod application to accomplish tasks and drew up suggestions for classroom activities, indicated that participation had raised their awareness of competence in accomplishing tasks.

【キーワード】 辞書検索, 漢字, 初級, iPod touch, 課題遂行能力

### 1. はじめに

iPhoneやiPod touch等の携帯端末を学習に用いる事例が、最近話題になっている。学校教育では英語、国語、理科、社会などの教科学習や教室外活動、大学でもe-learning等、様々な分野で用いられている。本研究では、iPod touchを用いた初級漢字クラスの実践をもとにして、辞書検索活動から課題遂行能力の向上を考える。

### 2. 課題遂行能力

#### 2-1. 課題遂行能力の重要性

「課題」とは、一般に、人が何らかの目標や目的を達成するために行う行為のことをいう。日本語能力試験（新試験）およびJF日本語教育スタンダードでは、課題遂行能力を高めることが重要であるとされ、『新しい「日本語能力試験」ガイドブック概要版』には、日本語能力試験は課題遂行のための言語コミュニケーション能力を測るものであり、日本語に関する知識とともに、実際に運用できる日本語能力を重視すると書かれている。JF日本語教育スタンダードにおいては、相互理解のための日本語という理念の実現のために、

課題遂行能力と異文化理解能力が必要であるとされている。

教育の現場では、宿題のことを「課題」と呼ぶこともあり、授業の一環として行う現実に近い目的をもったひとまとまりの活動を「タスク(課題)」と呼び、使用するシートを「タスクシート」と呼ぶこともある。しかし、本研究では、授業のための課題ではなく、日常生活や現実社会の中のコミュニケーションなど、日本語の実際使用の場面において何らかの目標や目的を達成するために行う行為を「課題」と呼び、その課題を行って目的を果たすことを「課題遂行」と呼ぶ。また、課題遂行ができる能力を「課題遂行能力」と呼ぶ。

## 2-2. 漢字を含む課題の遂行と辞書検索

生活上の課題を遂行することは初級学習者にとっても必要なことである。しかし、非漢字圏の初級学習者にとって、例えばドラッグストアで化粧品を買う時にパッケージの「無香料」や「乾燥肌用」といった表示を見て商品を選ぶといった、漢字を含む課題を遂行することは容易ではない。初級を教える教師の中には、言葉や漢字は授業で学ぶものをリストにして、意味や読み方を付けて提示することが前提になっている人もいるであろう。しかしそれらの知識だけでは、学習者に課題を遂行する力をつけることはできない。

一方、個々の課題に関しては、学習者が自分で辞書を引いて調べればよいと考え、それを推奨している教師もいるだろう。辞書検索については、「学習者が自律学習できるように、早期辞書検索能力・技術を身につけるべき」(カイザー1998)であることが以前から指摘されている。鈴木(2010)においても、辞書は、地域住民である外国人が、自立した生活者として「自分に必要な語彙を学びとっていく」ためのツールであり、辞書利用の指導の必要性が述べられているが、必ずしも学習支援にあたる者がその重要性を認識しているとは言えないのが現状である。辞書検索活動を取り入れた柳町他(2006)の実践では、「漢字以外の文法、読解、作文等の授業、更には自宅学習や日常生活においても、学習者が自発的に辞書検索活動を行う様子が観察・報告されるようになった」とあり、授業で辞書検索を積極的に行うことが課題遂行につながることを期待できる。

しかし、初級の非漢字圏の学習者にとって、辞書を使うことは簡単なことではない。伊藤他(2000)は、初級学習者が短文中の未習漢字熟語を辞書で検索する過程をビデオカメラで記録し、事後インタビューの結果と合わせて分析した。その結果、接辞の認識、文脈との照合、辞書の熟語の記載法、一字単位のまとまりの認識が問題になることを明らかにした。また、単漢字でも、字形と部首の認識に問題があることがわかった。

では、漢字が含まれる課題遂行のために、教師はどんな支援を行えばいいのであろうか。

## 3. 実践の概要

### 3-1. 授業の目的と対象

桜美林大学では、学習ツールとして iPod touch を導入した漢字の授業を行っている<sup>(1)</sup>。この授業の概要を表1にまとめる。

表1 初級漢字クラス

対象者	非漢字圏、初級の短期留学生。総合的な日本語科目(必修)でも漢字の学習を行っている。
時間数と種類	90分/週 15週(選択科目)
主な目的	漢字に関する基本的な知識と字形の認識力を身につけ、個別に漢字学習を続けていけるようにする
人数・母語	2010年秋学期履修者12名(英・タイ・韓・ドイツ・オランダ・ポルトガル)

学習者は母国の大学や独学で漢字を多少学んでいるが、漢字が苦手だからこの授業を履修する者もいれば、将来、中級に進むことを目指して、多くの漢字を学びたい者もいる。留学における日本語学習の位置づけは個々に異なり、日本語の上達よりも、日本の生活を体験することが主な留学目的の学習者もいる。「日米首脳会談」が読めるようになりたい学習者も、メニューの「大盛は無料」のほうが大事な学習者もいる。

学習者が漢字を学ぶ際、教師の支援がないと、「正しく書き写すことができない」「フォントによる字形の違いを知らない」ことで、不適切な字形で覚えてしまう等の問題がある。また、2-2に述べたように、初級学習者にとっては漢字で書かれた語の意味や読み方を調べるのは難しい。そこで、個別に漢字学習を続け、各々の課題に対処できるようになるためには、それぞれの学習者が辞書を用いて必要な時に漢字に関して書き方や読み方を調べ、正しく書き写すことができるようになるための練習をする必要があると考えた。

### 3-2. 授業タスクの例

初級学習者が出会う漢字に関連する課題には、どのようなものがあるだろうか。友達から来た日本語のメールに日本語で返信する、リモコンの「暖房・冷房」等の表示を読む、好きな漫画を日本語で読むなどが考えられる。その際、既知の日本語を漢字でどう表記するか、漢字で書かれた語彙の意味や読み方、英語で思い浮かべた言葉を日本語でどう表現するかなどを調べることもあるだろう。

そこで授業では、①日本語の言葉のひらがな(音)から、それに該当する漢字表記を調べる(あるいて→歩いて 図1)、②英語からそれに相当する日本語とその漢字の書き方を調べる(cat→猫)、③熟語の読み方と意味を調べる(思考→しこう・thought)、④フォントの違いを認識し、ゴシックやデザイン性のある形で書かれた漢字について調べる授業タスクを行った。さらに、漢字語彙の知識を増やす方法を示すため、⑤一つの漢字にどのような読み方があるか調べる(強→きょう・しいる・つよい・ごう・こわ)、⑥ある漢字を使った語を調べる(勉強・強盗 etc.) ことも練習した。また、⑦自分の知っている日本の地名(「江の島」など)の漢字を書く、⑧学外で見つけた漢字の写真を撮り、その読み方と意味を調べる、⑨共通点を持つ漢字語彙を複数、学習者が挙げるといった、初級の総合教科書ではあまり見られない漢字語彙を扱う授業タスク(鈴木他 2011)に発展させていった。

⑨の授業タスクは、本授業の総まとめ的な位置づけで行ったもので、自分が覚えたい漢字語彙を学ぶ、既存の漢字語彙知識を復習する、協働活動を通して知識を広げることを目的としたもので、本稿では「漢字のことばネットワーク」と呼ぶ。この授業タスクは以下の手順(表2)で行われ、その過程で適宜、辞書が使用された。

図1 て形からの検索



**表2 漢字のことはネットワーク 手順**

1.	学生それぞれが何らかの共通点を持つ漢字語彙を8つ考える。その際、自分が言いたい意味の語を知らない、または漢字でどう書くかわからない場合、辞書で調べる。(例：練習・経験・勝つ… 共通点は「スポーツ」)
2.	ネットワーク作成者が8つの語のうち3つを板書する。(例：練習・経験・勝つ)
3.	他の学生が共通点を考えて言う。板書された漢字語彙の読み方や意味がわからなければ、辞書で調べる。
4.	作成者が正解を発表する。(例：「これはスポーツの言葉です。」)
5.	その共通点を持つ他の漢字語彙を他の学生が板書に追加する。その際、自分が言いたい意味の語を知らない、または漢字でどう書くかわからない場合、辞書で調べる。(例：試合…)
6.	作成者自身が考えた語彙で5に含まれなかったものがあれば、作成者がさらに紹介する(例：筋肉、努力…)

#### 4. 授業における辞書の使用

##### 4-1. iPod touch とアプリケーション

iPod touch は apple 社の携帯端末で、形は iPhone に似ているが電話機能はついていない。パソコンのソフトウェアにあたる各種の「アプリ」(アプリケーション)を入手して使用するが、本実践で主に使用した「詞」(Kotoba!)は無料の辞書アプリ<sup>(2)</sup>である。授業活動に適した辞書を所有していない履修者に対しては、iPod touch を貸与した。

iPod touch の「詞」では、手書き入力が可能であり、収録されている漢字・語彙の量も多く、漢字の辞書と和英・英和辞典との間を素早く行き来できるという特徴を持つ。「手書きができる電子辞書と比べて安価であること」「iPod touch および同様の機能を持つ iPhone、それらに対応するアプリは世界中で購入が可能であること」「履修時にすでに持っている学習者が複数名おり、帰国後に学習者が購入した場合でも、授業で学んだスキルが活用できること」も利点である。

「詞」を用いた前述の漢字のことはネットワークにおいては、以下の検索行動が行われた(表3)。右端の数字は表2の手順の番号と対応する。

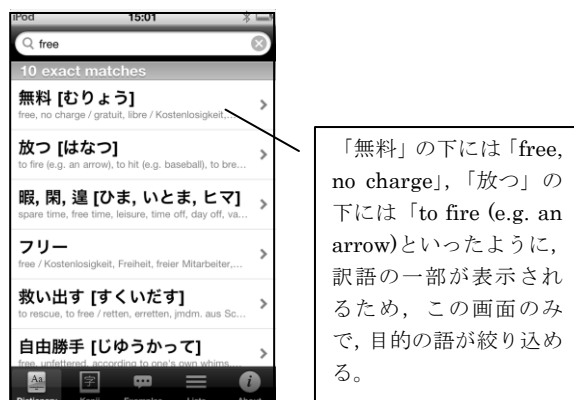
**表3 検索行動のプロセス**

英語で思い浮かべた言葉を日本語にする(例：「win」→「勝つ」)	1・5
日本語の既知の語を漢字表記にする(例：「れんしゅう」→「練習」)	1・5
漢字の語の読み方と意味を調べる(例：「経験」→「けいけん experience」)	3
漢字の正しい字形・筆順を確認する(例：「試合?」「試合?」→「試合」)	1・2・5・6
長・促・濁音などを間違えずに入力する(例：「れんしゅ?」「れんしゅう?」→「れんしゅう」)	1・5
表示された画面から目的の漢字(語彙)を見つける(例：game…「試合?」「遊戯?」→「試合」)	1・3・5
漢字の字形を正しく認識し、手書き入力や板書時に書き写す(例：「力?」「刀?」→「力」)	1・2・3・5・6

##### 4-2. 辞書検索活動の分析

冊子の辞書の場合、音訓・部首・画数等の知識がないと検索できないため、検索方法を覚えるまでに、授業時間の多くを費やさなければならなかった。また、使い方を覚えてからも、検索したい漢字にたどりつくまで様々なページを見なければならぬため、検索に時間がかかり、学習意欲を失う学習者が見られた。一方、初級学習者にとっては電子辞書の使用も簡単ではない。英和辞典を利用する場合は、日本語は漢字仮名交じりで表示されるため、ジャンプ機能をうまく使わなければ、表示された語の読み方がわからない。また、「無料」という日本語を知らず、「free」で検索すると多数の語義が出てくるが、自分が知りたい語がそのうちのどれかを知るには、一つ一つジャンプして英訳を見なければならぬ。さらに手書き入力機能を使っても、書き方によっては、辞書が認識しないことがある。

図2 「free」検索結果

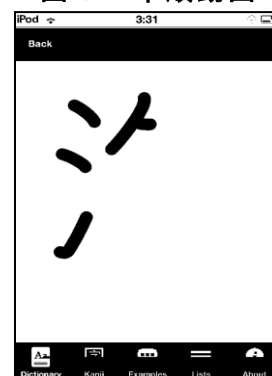


これに対し「詞」では、音訓・部首のほか、手書きや、部首以外の構成要素からも検索できる（例えば「医」は、「匚」からも「矢」からも見つけることができる）。また、限られたスペースに意味が英語で表示され（図2）、さらに詳しい情報が必要な場合は、そこをタッチすればよい。紙のページをめくるかわりに指で画面をスクロールし、すばやく情報を見つけることができる。漢字の拡大表示や、筆順の動画（図3）も見ることが出来る。

前述の漢字授業において、冊子の辞書を使用していたころは、辞書を引く方法を練習するために10週以上を費やし、さらに学習者が調べる漢字語彙を教師がコントロールして、辞書に掲載されている語彙に限って提示する必要があった。しかし、iPod touchの「詞」を使用した授業では、検索に嫌気がさす学習者が減ったことが、参与観察からわかった。辞書の使い方に関しても、3週目には全員が慣れ、3-2で述べた①～⑥の授業タスクも早い段階からできるようになった。その結果、「富士見三丁目」「無着色」「各停」といった学習者が生活で出会う漢字語彙を教師の支援なしに調べることができた。これらの語彙は、その学習者が課題を遂行するために必要な語彙であったが、容量に限りがあり、頻繁に改訂することが難しい一般の和英辞典には含まれていない。「無着色」のように接頭辞がついた語や動詞の「て形」（図1）からも検索できる機能は、文法の知識を補うものである。さらに入力に関しては、手書き入力が苦手、小さなキーが押せないなど、向き不向きがあるが、複数の入力方法があることにより、ほとんどの学習者が辞書検索を円滑に行うことができた。

以上から、iPod touchや「詞」の入力方法や表示方法、タッチやスクロールといった直感的な操作が、紙の辞書や電子辞書に比べ、辞書検索活動の負荷を軽減させたと同時に、課題遂行能力を向上させるための授業に役立ったと考えられる。

図3 筆順動画



## 5. ラウンドテーブルについて

### 5-1. ラウンドテーブルの概要

- ・開催日時および場所：2011年8月7日（日）9時半～12時半 横浜国立大学
- ・参加者：17名。1人1台、iPod touchまたはiPhoneあるいはiPadを使用
- ・本ラウンドテーブル以前にiPod touch（またはiPhone、iPad）を操作したことがあると答えたのは17名中5名であり、他は初めてか、ほぼ初めてであった。

### 5-2. ラウンドテーブルの流れ

ラウンドテーブルでは、参加者が初級学習者にとっての辞書検索の難しさを意識したうえで、改めて教師として活動を考えることができるように流れを組み立てた。また、iPod touchの操作に慣れていない参加者が多いため、操作説明の時間もとった。以下がその流れである（表4）。

**表4 ラウンドテーブルの流れ**

実践の紹介	iPod touchを用いた初級漢字クラスにおける授業タスク例
体験1	参加者が iPod touch をそれぞれ1台使用し、起動から辞書検索の操作を行う。 iPod touch および辞書アプリの使用に関して、印象を述べ合う。
体験2	グループで、自分自身が非漢字圏の初級学習者であると想定して、iPod touch を用いた辞書検索を伴う漢字タスクを行う。 グループごとにタスクの過程での気づきを書きとめ、各グループによるタスクの成果とともに、参加者全体で分かち合う。
授業タスクのアイデア	グループごとに「課題遂行能力とは？」について意見を交換する。 グループで iPod touch の辞書アプリ「詞」の使用を前提とした、課題遂行能力の向上を目的とした授業タスクの例を考え、活動案を作成する。 タスクのデモンストレーションを行い、感想を述べる。
まとめ	課題遂行のために、学習ツールでカバーできること、教師が支援すべきことを考える。

### 5-3. ラウンドテーブルの報告

「体験1」では、iPod touchの基本的な操作を体験してもらったが、初めての人でも、限られた時間内に操作ができるようになった。ラウンドテーブル終了後のアンケートによると、機器を実際に触ったことが楽しかった、役に立ったという感想が多く見られ、新しいツールそのものへの興味と関心が高かったことがうかがわれる。

「体験2」では、自分が初級学習者であると想定することから、様々な気づきが見られた。具体的な事例として、「うどん」のように通常ひらがなのものも辞書に漢字が出ていれば漢字で書いてしまう可能性があること、「やきそば」で辞書を引くか「やき」＋「そば」で引くかで結果が変わること、複合語では語の切れ目がどこにあるかわからないことなどが挙げられた。これらには前述の伊藤他（2000）による調査結果でも挙げられていたことが多く、参加者はある程度適切に初級学習者を想定することができていたようである。

「授業タスクのアイデア」の作成にあたっては、教師の視点に戻り、まず「課題」を決め、次にそれを遂行する力をつけるための活動案を考えた。中には、「課題」を絞り切れなかったり、具体的な活動がなかなか浮かず、苦労したグループも見られた。「授業タスクのアイデア」の例としては、自動販売機で好みのコーヒーや紅茶を買うという課題が考えられた。学習者は「加糖、微糖、無糖」などの表示を読み解くことができなければ好みの缶コーヒーを買うことができないため、辞書の使用が必要となる。

初級学習者の身になって辞書の使用してみることは、教師として異なる認知をすることであり、難しいが、よい経験であったというコメントがあった。

## 6. 辞書検索活動から課題遂行能力の向上を考える

### 6-1. 教師はツールに目を向けているか

ラウンドテーブル終了時のアンケートによると、参加者のほとんどは、iPod touch に対

して興味を持って参加していた。なかには、「学習者がよく使っている「詞」にも興味があった」「新しい検索の方法がいろいろと出てきていることがわかった」との声もあり、ツールについての知識を高めたいという積極的な姿勢がうかがえる。

iPod touch を使った「詞」に関しては、「電子辞書より縦横無尽に調べられるという利点がある」「操作や機能を覚えるまで少し時間が必要だが一般的な辞書よりは便利だと思った」と、肯定的な評価が複数見られた。

一方で操作に難しさをおぼえた参加者もいた。学習者の立場でのコメントとしては「手書き入力は難しい」というものである。手書き入力は、筆順や字形が適当でない場合、調べたい漢字が出てこないため、一部の学習者にとっては困難なものである。iPod touch の場合、手書き入力ができなければ構成要素から検索するという選択肢がある。しかし、読み方のわからない漢字を調べる際に、そのまま書き写すだけで検索できる手書き入力は、有用な手段である。それであれば、手書き入力で認識されやすい漢字が書けるように、練習したほうがいいのではないか。

操作の難しさについては「ミスタッチなどが多く、使いやすさをあまり感じられなかった」「マニュアルなしではけっこう大変」と教師側のリテラシーの問題もある。新しいツールの使用は「次々と新しい機器がでてきて、教師側も対応していくのが年々大変になってきたと思った」というコメントに代表されるように、教師にとって負担になることがある。

初級の授業では、一般に教材として語彙リスト、漢字リストを提示することが多いと考えられる。学習者が多義語を辞書で調べると、テキストに出てくる意味と異なる場合があるという理由で、辞書の使用を制限すべきだと考える教師もいるかもしれない。しかし、学習者が実際に日本語を運用する場面では、授業で使っている語彙リスト、漢字リストに載っていないことが必要になってくる。初級のうちに学習ツールの利用法も指導するという意識も重要であろう。

また、自分が知らないツールを学習者が使用することに、理解を示さない教師もいる恐れがある。例えばNintendo DSを手書き入力ができる辞書として使用する学習者もいるが、教師の常識にとらわれ、ゲーム機であるDSを電子辞書よりも劣るものと批判的に見る場合もあろう。学習者にとって「テキストの日本語を学ぶ」のが日本語学習の目的でないならば、学習者が課題遂行のために使っている・使えるツールを教師の都合（リテラシー、常識）で排除するのではなく、ツールに対しても関心を持つべきではないか。

とはいえ、「ツールについて知らないのは教師の怠慢」とは言い切れない。テキストなどの教材の場合、出版社や書店、他の教師から情報が得られやすいが、ツールに関しては、教師が関心を持っていても、環境によっては情報が入りにくい場合もある。ツールの変化の大きい現代では、今まで以上に情報共有の重要性が高まっているとも言える。

## 6-2. 辞書引きでは定着しないか

ラウンドテーブルで辞書検索活動を体験している際、「簡単に調べられると、漢字を覚えなくなる」というコメントが複数あった。平塚他（2005）は、辞書の使用が漢字記憶の促進に効果があるとしており、特に字形の記憶への効果が明らかとなっている。しかし、ここで注目したいのは、「本当に漢字を覚えられるかどうか」ではない。課題遂行の観点から言えば、引いた漢字を覚えなくても、素早く引ければいいだけの場合もある。その学習

者にとっての課題に何度も出てくる漢字であれば、何度も引いているうちに覚えるかもしれないし、その漢字語彙を調べる必要が一度しかなかったなら、それは課題遂行のために定着させる必要のない語彙だったとも言える。

教師の中には、「授業でやること＝覚えるべきこと」という意識を強く持っているものもいるかもしれない。課題遂行の観点からは、覚えるべきかどうかは学習者によって異なるものであり、教師がすべて「定着させる」よう、コントロールする必要はないのではないだろうか。

### 6-3. 教師は何をするか

電子辞書も iPod touch も、必ずしもすべての学習者にとって簡単なものではないことは前に述べた。では、課題遂行のための辞書検索活動に関して、教師が教えるべきことは何なのか。

#### (1) 学習ツールと使い方

使いやすいツールというのは学習者によって異なるが、インターネットの利用も含め、どんなツールがあるか、どのような使い方ができるのかを学習者に伝えることは、学習者の選択肢を増やすことになる。それも学習支援の一つである。たとえ教師がそれを使いこなせなくても、授業で扱うことで、学習者同士の協働的な学び合いが生まれることもある。

例えば、iPod touch を授業に取り入れることによって、以下のことができるようになる。

ペット飲料の注意書きの「凍らせないでください」の意味を理解するためには、「凍」という単漢字の意味を知るだけでは不十分である。「詞」の場合は、「凍」の漢字情報から view kanji compounds をタップすると、「凍結」「氷、凍り」「凍る」などの語が表示される。「凍る」が動詞であることはその画面からわかるので、「凍る」を選択すれば、その活用の情報から「凍らせない」の意味がわかるようになっている。「ください」の意味も調べられる。「凍る」の意味、辞書形、使役形、ない形、「ないでください」をすべて知らなくても、このような使い方を覚えれば他の場面でも応用がきく。

#### (2) 語構成

伊藤他(2000)で接辞の認識の困難点の例として挙げられた「無資格」は、「詞」では見出し語にある。また、「芸術家風」はないものの、「芸術家風」と入力し、それが見出し語にない場合、最後尾から文字を一字消す(この場合、「風」と、「芸術家」という見出し語が見つかる。その後、「風」の意味を調べれば、全体の意味を理解することができる。複合語、例えば「会員限定」の場合、「定」を消しても「会員限」は出て来ないが、もう一文字「限」を消すと「会員」が出てくる。接辞を含む語や複合語は学習者にとって検索しにくい、語尾の数文字が接辞や複合語の切れ目になる可能性があることを知っていれば、検索が容易になる。語構成に関する意識を高める検索活動を授業で行うことによって、接辞の知識も増えていくことが期待できる。

#### (3) 文脈および背景知識

4-2 で述べたように英和辞典の機能による検索や、漢字語彙の意味を調べる場合、複数表示される見出し語から文脈に合った語を選ばなければならない。語と訳語は一对一で対応しているわけではないので、文脈との照合を授業に取り入れることも重要であろう。

また、背景知識も無視できない。大学の留学生から、学内の PC を利用する場合、ログ



イン画面やワードのツールバー、「再起動」等の表示は漢字が使用されており、慣れるまで大変だったと聞いた。その学生は母語でのPCの使用にたけていたため、表示の場所などから推測し、試行錯誤で覚えていったという。しかし、それでは解決しないこともある。例えば商品を購入する際、自分の知りたい情報が商品のどのあたりに書いてあるのかが全くわからなければ、必要な情報とは関係の薄い企業名や商品名の意味など、大量の語を調べなければならない。「無香料」の商品を買いたい学習者にとっては、「無香料」の意味がわかるだけでなく、一般的にどこにその情報が書かれているのかも知っておいたほうがよい。

学習者それぞれが経験によって学んでいくことも大事だが、授業で、その経験を学習者間で共有する、具体的な文脈や背景知識の中で漢字語彙を見てどんな情報が重要か話し合う、分担して調べるといった活動を行うことが、課題遂行能力を上げることにつながる。

#### (4) 覚えたほうがよい漢字

6-2で授業で扱った漢字語彙すべてを定着させなくてもいいと述べたが、覚えておくことよい漢字語彙と、覚えてもあまり他の場面でその知識が生かされない漢字語彙があるのは事実である。例えば「綾鷹」というお茶の名前の漢字よりも、「氏名」のほうが、他の場面でも目にする機会が多い。個別の学習者が知りたい・学びたい漢字を教師が決定することはできないが、より汎用性の高い漢字語彙については、覚えておくことよいと伝えることは有用だろう。入力時や検索結果から探している漢字を見つける際も、既知の漢字が多いほうが、早く検索できる。辞書を多用せず、既存の知識から推測することも可能である。課題遂行の観点からも、漢字を調べる方法さえ学べばいいのではなく、知識量も重要であることはいうまでもない。

以上、4点を教師からの支援に取り入れるべきものとして挙げた。学習者がこれらを自分で発見し、できるようになることもあるが、自発的に日本語に触れる機会が限られている学習者には困難である。そこで、できる限り教師が機会を作ること、具体的には、個々の学習者が持っている課題のために必要な知識やスキルを教師が引き出して、授業に盛り込むことが肝要である。

#### 6-4. 課題遂行能力向上の支援のために

ラウンドテーブルにおいて学習者にとっての課題を考える過程で、参加者は、学習者を取り巻く環境下にどのような漢字語彙があり、それらの意味がわからないと、どのように困るのか考えた。それは、学習目的と授業内容との対応について見直すきっかけになったのではないだろうか。

何を教えるべきかは、一人一人の学習者の資質や個性、経験、知識量、興味などに応じて異なるものであり、それは漢字学習に限ったことではない。課題遂行能力の向上のための支援をするには、学習者の置かれた環境や、学習者の行動や関心、将来に目を向けなければならない。実際に授業でどこまでできるかは状況により様々であるが、まず教師の意識が重要なのではないか。

学習者にとっての課題は個別のものである。しかし、辞書検索の知識やスキルは、汎用性が高く、異なる課題においても使用できる。辞書検索活動は漢字を含む課題遂行能力向上の支援のための基本の一つと言えるであろう。

iPod touchの「詞」の使用を前提とした初級漢字クラス、およびラウンドテーブルでの

活動案から、生活上の課題遂行のためには、必ずしも従来の語彙、文型、漢字の提出順序にとらわれなくてもいいことがわかった。日本にいる留学生が生活上必要とする読解の課題としては、表示、申込書、注意書き、友人からのメールなどがあるが、その多くは漢字語彙の意味が理解できれば大意がつかめるものであり、要点の理解に必要な文型表現も限られる。書く課題には、アルバイトを除けば、問診票などのフォームや友人とのメールなどがある。フォームは母文化の知識の応用が可能であり、また友人とのメールであれば、短文でも済み、フォーマリティや男女差の不適切さはあまり大きな問題にならない。課題遂行の観点から初級のシラバスを見直した場合、文型も含めて従来とは異なるアプローチをすることも可能なのではないか。今後はシラバスの面からも、課題遂行能力の向上のための支援を考えていきたい。

\*本研究は科学研究費補助金(22320091 および 20220005)の助成を受けたものである。

## 注

- (1) 2010年度春学期以前の初級漢字クラスでは、濱川(2010)の方法で冊子の辞書を使用していた。
- (2) 「詞」(©2008-2009 Pierre-Philippe di Costanzo)はiPhone, iPadでも使用できる。

## 参考文献

- (1) 伊藤早苗・鈴木正子(2000)「初級学習者の漢字辞書使用について—漢字熟語検索における問題点—」『北海道大学留学生センター紀要』第4号, 38-57
- (2) カイザー, シュテファン(1998)「「非漢字圏=悲観事圏」からの脱却—漢字教育から語彙教育へ—」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 25-31
- (3) 国際交流基金(2010)『JF日本語教育スタンダード2010』, 1
- (4) 国際交流基金・日本国際教育支援協会(2009)『新しい「日本語能力試験」ガイドブック 概要版』, 1
- (5) 鈴木理子(2010)「就労者向け言語行動目標リストの開発」『地域日本語ボランティア養成講座の検証と実践モデルの構築』平成19年度～平成21年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(研究代表者:佐々木倫子, 課題番号:19520464), 127-132
- (6) 鈴木理子・齋藤伸子(2011)「「漢字ネットワーク」作成における iPod touch の使用—初級漢字クラスでの実践—」『日本語教育方法研究会誌』vol.18-1, 44-45
- (7) バックマン, L. F. ・パーマー, A. S. (2000)『<実践>言語テスト作成法』大修館書店 (Bachman, L. F., & Palmer, A. S. (1996). *Language testing in practice*. Oxford University Press.)
- (8) 濱川祐紀代(2010)「初級からの辞書引き指導の試み—日本語学習の幅を広げるために」『日本語教師のための実践・漢字指導』くろしお出版, 29-44
- (9) 平塚真理・副田恵理子(2005)「漢字学習における漢字辞書の使用効果—非漢字圏初級学習者を対象に—」『日本語教育』125号, 86-95
- (10) 柳町智治・副田恵理子・平塚真理・和田衣世(2006)「辞書検索能力を養成する初級漢字カリキュラムの理念と実践」『日本語教育論集』22, 国立国語研究所, 33-47